

第104回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2018年3月12日 (月) 14時～17時

兼題「干潟」

- 川井素山 ○捨てられぬ妻の繪手紙花ミモザ
菜の花や蔵の白壁日を溜めて
品書に春見つけたり宵の酒肆
残照に篋の影ひく干潟かな
- 保井寶正 ○満ちる時逢瀬の別れ汐干潟
仲春や千年炊きの南禅寺
想ふことメールに落とす春の夜
沈丁のほのかな香をり手に掬ひ
- 佐久間喬 ○杉の花マスク美人を生み出せり
春干潟動くものみな泥の中
尻濡れるほど獲物得て暮干潟
春一番猛雨従へ唸りをり
- 後藤克彦 ○雪達磨雪間に覗くポストかな
走る子の足跡続く大干潟
蒲公英の絮に戯^{じゃ}れあふ子犬かな
選り疲れみな貌同じ雛の市
- 丸山酔宵子 ○熱つづき^{けだる}き夜や蜆汁
格子戸をくぐり抜ければ春時雨
白杭を微妙に越へて山笑ふ
芝生焼くバナ一片手に如雨露^{じょうろ}持ち
- 菊地崇之 ○有明の豊な干潟乾上りぬ
伸ばしたる手々と手と手と春火鉢
忘れ雪残る入院早や三月
艶肌や杯重なりしお白酒
- 吉田啓悟 ○干潟の朝わが足跡が最初なり
先んじて一輪萌ゆる春の朝
暗な書齋とジャズと花菫
古稀の年またたきに過ぎ^{さより}細魚喰ふ

- 青木英林 ○干潟には進化の遅きもの集ふ
春の雪装ひもなく消えてゆく
つちふるや近くて遠き国もあり
春雷が一夜で季節の扉開け
- 山本草風 ○^{うなそこ}海底の命^{きら}煌めく大干潟
みどりごやすやすやと春日差
永き日や寿司屋の暖簾まちきれず
春の朝光の^{しずく}滴 目覚めかな
- 佐伯兵庫 ○種を蒔く採用通知待つごとく
潮干潟小さな命宿る跡
春浅し多幸を願う絵馬揺れる
老夫婦苦い思い出冴え返る
- 佐久間たか子 ○潮干狩雲^{いっぺん} 一片に深呼吸

^{たれがし}誰某に便り出したや春の宵
まったりと鯉の波形に水温む
遊園の主役となりて桜もち
- 渡辺鯨波 ○大干潟生き物係連れてゆく
啓蟄や成田エクスプレス乗車
春一番結論はピザの宅配
書き出しの一言出でず春の風邪
- 金森純女 ○耳赤き少女駆け行く初音かな
飛びたちし雉メスなりき銃おろす
なないろのチューリップあり銀座ゆえ
今はなきおのこを思ゆ汐干潟
- 澁谷瑠璃 ○たんぽぽの絮より先に旅に出る
引き裂かれたき仲もあり彼岸潮
春ショール愛の追ひ風乗らんとす
戴冠のシロツメクサの輪編みし日

原 晶如 ○恙なきさんてんいちいち轉れり
干潟踏む靴ににじみし喫水線
ものの芽のほぐれんとして濃紫
石山の 黙^{しじま} 彩り雪間草

永井正孝 ○春寒し夜明けの床に寝返りす
寒明けのテニスコートに若作り
冴へ返る夜空の立木風唸る
日を受けて蟹の手まねき潮干潟

青葉ひかる ○永らへし虚飾の日々に春嵐
干潟にも似ており我の愛の日々
春の雪番傘傾け美人画かな
マンガチックもみ消して春僕の家族

次回「萩句会」

日時 2018年4月9日(月) 14時～17時
場所 下目黒住区センター第二会議室

兼題 『落角』一句
当季雑詠 三句